



社団法人スウェーデン社会研究所

○ 社団法人スウェーデン社会研究所のHPはこちら

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31



Index

・目次

・日本とスウェーデンの
関係 -40年間の変化と
それに対する一考察-

・21回、22回、23回スウェーデン研究連続講座

・〔21回〕
スウェーデン人経営者の見たスウェーデンと日本
-滞在25年の経験を通じて

・〔22回〕
IFS社の理念とスウェーデンのソフトウェア産業

・〔23回〕
違いを生むものは何か
-スウェーデン人と日本人の歴史的社会的背景

・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

・「暗黙の了解」の支配する社会日本

・スウェーデン人そしてスウェーデングッズ

・北欧留学記

・スウェーデンで法学を学ぶ

・北欧ニューストピックス

・JISSからのお知らせ

・JISS所報原稿募集

■ 目次

・日本とスウェーデンの関係 -40年間の変化とそれに対する一考察-

・21回、22回、23回スウェーデン研究連続講座

・〔21回〕
スウェーデン人経営者の見たスウェーデンと日本
-滞在25年の経験を通じて

・〔22回〕
IFS社の理念とスウェーデンのソフトウェア産業

・〔23回〕
違いを生むものは何か
-スウェーデン人と日本人の歴史的社会的背景

・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

・「暗黙の了解」の支配する社会日本

・スウェーデン人そしてスウェーデングッズ

・北欧留学記

・スウェーデンで法学を学ぶ

・北欧ニューストピックス

・JISSからのお知らせ

・JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所 所報
No.326 2004年3月31日発行

発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1
榊科学新聞社内5階

連絡事務所
〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail sweden@tkm.att.ne.jp
URL: <http://home.att.ne.jp/apple/jiss/jiss.htm>

発行人・編集責任者: 波多野裕
Publisher&Editor in Chief: Yutaka Hatano
編集者: 久保田健司
Editor: Kubota Takeshi



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報 - No.326 - 2004.3.31

◎ [目次へ戻る](#)



日本とスウェーデンの関係 -40年間の変化とそれに対する一考察-

日本とスウェーデンの関係
— 40年間の変化とそれに対する一考察 —

ホーヌマルク株式会社 社長
ニルス・ホーヌマルク

「日本とスウェーデンは大変良い関係にある」という言葉は、駐日スウェーデン大使や駐スウェーデン大使の口からしばしば聞かれる言葉である。これは私が日本とスウェーデンに関わるようになって40年、全く変わっていない。ところでこの「良い関係にある」という言葉の真の意味だが、「日本とスウェーデンの関係が重要だ」という意味ではなく、「悪い関係になるはずがない」という意味に解釈したほうが良さそうだ。日本からすれば、国との関係で最も重要なのは米国、そして近年とみに力をつけてきた中国であって、最近ますますその重要性が強まるにつれ、日瑞の関係は国間の距離が遠いこともあって心情的には離れていっているような気がする。

30年前は日本人はもつとずっとスウェーデンに関心があった。まずスウェーデンへの直行便があったし、スウェーデンは国際的センスに秀でた裕福な国として日本人の関心を強く引いていた。ノーベル賞、発明の国、そして社会資本の充実した国としてスウェーデンは第二次大戦後新しい世界に目覚めた日本を惹きつけていた。我々が1970年代のはじめJSF(日瑞基金)とその姉妹組織JSFスウェーデンを設置した時は、多くの日本人研究者達がスウェーデンで学びたいという強い希望を持っていた。しかしその頃スウェーデンでは日本へ行きたいという研究者はゼロであった。

ところが、それが今では逆になっている。JFSは、今では日本の研究者をスウェーデンに送ることをやめてしまった。日本の研究者達は積極的にスウェーデンに行きたいという気持を持たなくなったし、持ったとしても円が高くなったので自費で簡単に行けるようになったからである。(私が日本へ来た時は1スウェーデンクローネが75円であったが、最近は15円である。)

一方今スウェーデンの若い人達は、JSFが日本で学んだり研究することを望む人に毎年提供している50の奨学金の枠のひとつを取ろうと一所懸命なのである。

産業部門においても同じことが起っている。私は1966年当時アセア(ASEA)の若い研修技師として日本中を巡りながら超高压クウィンタスプレス機を紹介して歩いていたが、日本の企業はどこも大歓迎で20から30人もの人が集まってくれ、私のさして複雑でない話に熱心に耳を傾けてくれたものである。

82年頃には、私はアセアの産業用ロボットを売り歩いていたが、この頃になると様相が変わってきた。日本の企業は相変わらず我々に興味を持っていたが、すでに日本の会社は強い競争相手になっており、日本はロボット王国だという意識もあって、我々のプレゼンテーションも疑問符つきで、又時々は尊大な態度で聞かれるようになっていた。

そして90年初めになると、日本は自国産業に対する自信がピークに達したのであるが、幸いなことにスウェーデンも自信を強めていたので、日本はこの頃から再びスウェーデンから良い点を学びとろうという気運になってきた。

産業については、スウェーデンで起っている大きな変化について触れておかねばなるまい。日本でも同じ変化が起ると思われるからである。15年前、私のいたアセアはスイスのブラウンボベリ(BB)を買とりABBとなった。スウェーデン人はこれを見て、強い会社ならば世界に向けて拡大してゆくのは当然だと考えた。事実これが外国の企業との合併や買収により、スウェーデンの産業が外部に流れ出てゆくはしりとなった。ABBは今やスイスの、ボルボやサーブ、ファルマシアはアメリカの、そしてアストラはイギリスの会社になっている。

もしこのスウェーデンで経験した産業面での変化が日本でも起るとしたら、15年後にはトヨタはアメリカ、ヨーロッパ、中国の大方の自動車会社を傘下に収め、とてつもなく大きな自動車会社に

なっているだろう。そしてダイムラークライスラーも買いつけて、性格的にはドイツの会社になっているのではないか。ホンダは飛行機も作るアメリカ性格の会社になっているだろう。そして日本の製薬会社のほとんどは外資系会社となり、活動の拠点は海外になっているだろう。

政治的には、スウェーデンと日本は特筆すべき関係はない。両国は丁度国際連合で決定する国際条約のような普遍的な国同士の条約での付き合いを続けてゆくだらう。私が冒頭「日本とスウェーデンの間には何も問題がなく大変良い関係にある」という意味を、「悪くなるような付き合いをしていない」というように解釈したのは、そのような理由もあつたのである。

日本を訪れる政権を担当するスウェーデンの政治家は、おしなべて社会民主党である。従って彼等が常に良い関係を持ちたいと考えてきた日本の政党は社会党で、まさしく心の友なのである。ところが残念なことに日本の社会党は(村山実氏が彼の魂を売り渡した時以外)政権を担当したことはなく、今だに政治的な力のない党なのである。日本の政権を担当する歴代の首相は、ほとんど保守系の自由民主党出身であり、ストックホルムを訪れたことはめったにないし、訪れたとしても「スウェーデンモデルの罪」を調べるのが主たる目的だった。その後訪問の目的は、環境保護活動や医療や高齢者介護、税制度(但しこれには警戒心をもって)等の調査に変わってきたが、基本的にはスウェーデンから学ぼうというものでなく、スウェーデンの中で行なわれている諸活動の中から、日本でも使えそうなアイデアのヒントがあれば得てゆこうというものであった。

ここで税について述べておこう。理解をしておくべきは、スウェーデンでは基本的には税率100%もありうる、という下地があることである。これは一言で言えば、個人や企業が得た所得は全て政府に納め、それを政府は納めた個人や企業に再分配するという方法であるが、しかし民主党等の野党議員の主張による修正により、集められた税金は個人や企業に戻すだけでなく、適性な国民のための目的にも配分されている。

スウェーデンの税のシステムは、「平等主義」を基本としている。ここで言う「平等主義」とは、例えば病院で働く人は、医者も掃除人も報酬は同じであるべきだとするような考え方である。スウェーデンの政治家は通常教育というものを重要視せず、自分は労働者出身だということを強調している。それだからというわけではないが、政治家は一般に高所得者ではない。政治家を選ぶスウェーデンの有権者の60%は政府や地方自治体の職員、そして年金生活者、失業者、病欠者など他からの支援なしでは暮らしてゆけない人達である。従って有権者の大半は社会民主党を政権の座から降したくないのである。

日本の政治では、近年いわゆる日本型システムから開放された明るい動きが出ており、政府はできるだけ小さくし、選挙では自由民主党を支援するのであれば(例えば医師会の活動のように)民間の活動を自由にし、かつ大いに奨励するようになってきた。日本の場合は、政治家は皆高いレベルの教育を受けているし、又報酬も多すぎる位高い。

文化面においては、広い範囲で日瑞間の交流が行なわれるようになってきた。ストックホルムのすし屋は、40年前は一軒だったのに、今や50軒にもなっている。これは大変な増加ぶりだ。又、スウェーデンスタイルプロジェクトでは、最近スウェーデンのデザインに日本的なものが取入れられてきている。

スウェーデン人の名前で日本人に知られているのはあまり多くないが、イングリット・バーグマン、アニカ・ソレンスタム、ビョルン・ボルグ、インゲマル・ステンマルク、ABBAなどはよく知られている。最近タクシーに乗ったところ、運転手はグレッタ・ガルボ知っていると云ったが、その運転手は相当の年配者だった。

日本人の名前は、スウェーデン人にとってはもっと異国的で馴染が薄い。スウェーデンで日本の首相に名を知っている人は非常に少ないと思うが、日本人でスウェーデンの首相の名前を知っている人も少ないであろう。(2004年3月にゴラン・ペルション首相が日本を訪れたが、気がついた人はどれだけいたのだろうか?)

スウェーデンと日本の関係のなかで、長年に亘って最も親密な関係は、スウェーデン国王一家と、日本皇室一家との関係であろう。国王一家と皇室は長年固いきずなで結ばれていて、これに関して言えば日本とスウェーデンは真の意味で良い関係にあると言えるだろう。

最後に結婚事情について触れておこう。私が妻紀子と結婚した36年前は、スウェーデンと結婚した日本人はほとんどいなかった。最近では日本に来た若いスウェーデン人の純粋な関心によって、スウェーデン人と日本人の結婚はブームの様相さえ示している。

多分これが、日本とスウェーデンの関係において、ここ数年の最も健全な変化と言えるだろう。

○ [目次へ戻る](#)



12月15日 第21回スウェーデン研究連続講座

スウェーデン人経営者の見たスウェーデンと日本
 -滞在25年の経験を通じて

ガデリウス(株)
 IT本部長
 ヨーラン・エドマン

私はスウェーデンの会社の社員や経営者として、又ある時はスウェーデン政府の職員として25年間日本に滞在し、スウェーデンと日本の産業の交流、文化の相互理解のために働いてきたが、このたびその任務に区切りをつけ、スウェーデンに戻ることになった。25年間東京で暮し、3人の息子も日本で育つなど日本に馴染んだので、日本を離れるということはほとんど考えられないことなのだが、人生には潮時というものがあり、私も今回その潮の流れに沿うこととした。

日本を離れるにあたり、一スウェーデン人の見た日本の印象を、時代を追って述べてみようと思う。

1980—1985時代

私が最初に日本に関りをもったのは、ASGという国際輸送会社の社員として日本に来た時である。この時感じた日本ビジネスの特徴は、①セールスの力は世界一 ②マーケティングはない ③リスクは悪と考えられている ということであった。

すなわち、日本人は人間関係の構築には非常に勝っていて、これがセールスを強くしていること(お客様は神様です)、反面顧客との人間関係を大事にするあまり販売戦略がないこと、そして日本ではリスクがある場合は決断ができない、という特性があることを実感したのであった。

1985—1991時代

85年から6年間は、私はスウェーデン大使館商務部の商務官であった。この時代日本は経済の高度成長期を経てバブル経済の真っ直中にあり、この頃の日本はおしなべてどの分野でも世界一になろうとしていた。そのやり方は、他の国とのバランスなどにはお構いなしだったので、欧米では日本製品の排斥運動が続発した。しかしそれまでの日本的経営スタイルでは、結果的に一部の分野を除き、日本は世界一になるのは無理であった。ただこの時期日本にいて私が学んだことは、“Winner gets all”、すなわち勝利者が市場を独占できる時代に入ったということであった。

1991—1995時代

91年からは、私はスウェーデンの生命保険会社SKANDIAに勤務した。ここでの私の大きな仕事は日本の役所から認可を貰うことであったが、あるひとつの認可を貰うために私は123回も大蔵省に通った。

日本では国の認可を貰うのには、役所から何十もの印(ハンコ)を貰わねばならないのだが、そのプロセスはあたかもオリエンテーリングで地図とコンパスだけで目的地を目指し、チェックポイントでスタンプを貰うプロセスに似ていた。(しかも地図も目的地も歩行の途中で変化したのである)ある時は2年かけて必要なハンコを全部貰ったところ、様式が古くなったといって又最初からハンコを貰い直し、結局認可を貰うのに5年かかったこともある。ここで学んだことは、日本の役所には時間の観念がない、ということであった。

1995—1999時代

95年からは、スウェーデン投資振興庁(ISA)に勤務した。ISAは、日本からスウェーデンに投資をして貰うため、その手助けをする機関である。ここで認識したことは、日本の投資家は投資による成功率の見込みが100%では投資せず、130%の見込みがないと投資しないということであった。

2000—2003時代

2000年からは、スウェーデンの商社ガデリウスに移った。ガデリウスはスウェーデンを代表する総合商社で、産業機械、産業材料、消費財、病院用機材を得意とする。

この頃、すなわち2000年に入っても、日本経済は低迷から脱していなかったため、外国からは日本金融システムの脆弱さや護送船団方式の弊害などが指摘され、日本は沈みゆく大型船にまで例えられた。しかし私は商社マンの目から見て、日本にはトヨタなど極めて強い会社は健在であり、加えて日本の現場管理の優秀さ、社会システムの透明感の増加、企業のリストラの効果などにより、日本の産業力はかつての強さを取戻しつつあると感じている。

おわりに

日本人以外にとって、日本を理解するのは正直難しいことである。欧米人にとってやはり日本文化は異質だからである。“江戸男”(エドマン)と自称するほど日本に馴染んだ私ではあるが、それでも日本については分らないことは多い。

しかし、ある状況において日本人はどう動くのかということは外国人は理解しておくべきだし、そしてこれは又逆も真なりである。

日本では25年間、多くのことを学ぶことができた。日本の皆様ありがとう。

[目次へ戻る](#)

[このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報 - No.326 - 2004.3.31

目次へ戻る



1月28日 第22回スウェーデン研究連続講座

スウェーデン産業シリーズ No. 11
IFS社の理念とスウェーデンのソフトウェア産業

IFSジャパン(株)
社長
ステファン・グスタフソン

本日は、スウェーデンのパッケージソフト会社IFSについて、その会社と生いたち、及びその製品の特色、IFS製品を使って得られるメリット、更にはIFSの今後の展開について述べたい。

IFSとは

IFS社は20年前リンショピング大の4人の学生によって設立されたソフトウェアの会社である。この4人の設立者達は今も経営エグゼクティブとしてIFSのマネージメントトップにいる。リンショピングには、スウェーデンにおける7つの大きな産業クラスターのひとつが形成されているが、リンショピング大はそのクラスターの中で、ITにおける大学と産業の協業の中心的存在である。ITで最先端をゆくリンショピング大を母体にして生れたということにこの会社のひとつの大きな特色がある。

IFSは、企業の統合基幹業務システム分野では、スウェーデンでは最も有力な企業のひとつである。生産、販売、品質、人事など幅広い業務のデータを効率よく処理するソフトを販売し、世界46ヶ国で展開している。売上高は年約300億円、従業員は約3000人である。

IFS社の生いたち

IFS社の活動は、1983年、当時リンショピング大の4人の学生が会社を作り、自ら作成した発電所のメンテナンスのソフトウェアをスウェーデンの原子力発電所に売り込みに行った時に始まる。最初は原子力発電所の入口にテントを張って売り込むなど苦労を重ねたが、そのソフトが発電所の設備管理の保全システムに採用されることになり、会社として本格的な活動を開始した。

しかし、IFS社が現在の製品を販売するようになったのは、1997年からである。最初のIFSの設備メンテナンスシステムは順調に利益を上げていたが、IFS経営陣はその将来性に行きづまりを感じていた。IFSの経営陣とそのスタッフは新しい業務管理のあり方を模索し、1995年インターネットなど最新のIT技術を取り込んで業務の効率を大幅に向上させるソフトの構想を作り上げた。

そして、その構想をもとに1995-1997 全く新しくソフトを作り直した。現在のIFSの製品は、全てこの時代の製品が基本になっている。

IFS製品の特色

IFSの業務システムの特色は、ソフト会社が開発した総合システムを丸ごと顧客に売込むのではなく、プロジェクト管理、文書管理、品質管理、CRM(Customer Relationship Management)、SCR(Supply Chain Management)等の7つの分野の作業を標準化して64のコンポーネントに分け、そのコンポーネントを組合せることにより、非常に効率よく顧客の必要とする業務システムを構築できるところにある。

IFS製品を使って得られるメリット

IFS製品を使って得られるメリットとは、コンポーネントの組合せで、顧客の幅広い要求に応えられるようにしたことである。顧客の要求とは、例えば次のようなものである。

- ・限られた予算内で限られた期間でシステムを作りたい
- ・今期、来期、来々期とその時々々の予算に合わせてシステムを拡張したい
- ・既存の他社システムと繋ぎたい
- ・他のシステムと統合しても、新規の訓練は必要なしにしたい
- ・国や言葉が違う人達とも、同じシステムが使えるようにしたい

このような幅広い顧客の要望に対応しながら、基本的なところでは標準化を保てるようにしたこ

と、これがIFSを使って得られる最大のメリットである。

IFS製品の世界的展開

IFSのシステムは共通ユニットをロゴのように組合せて使用できるため、世界の大企業の種々のシステムで使われている。例を挙げると

- ・IBMのERPと携帯端末データの統合
- ・GEの航空機エンジンのメンテナンス／サービス
- ・NECの生産管理システム
- ・BMW—ボルボの生産管理
- ・中国サンキョウダム管理
- ・Kettel Foods(ポテトチップス)の生産管理
- ・ストックホルム交通局の信号メンテナンス等々。

IFSの今後の展開

顧客のビジネスがグローバルに展開してゆくのに合せ、IFSの製品も、設計もサービスもそれに合せたグローバルシステムにしてゆく。

そのためには、世界のどこでも使えると共に、地域性も取入れ(現在も23ヶ国語で使用できる)、顧客が真に要求するシステムを、顧客とパートナーシップを組みながら開発してゆく。

[○ 目次へ戻る](#)

[○ このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31

◎ [目次へ戻る](#)



2月26日 第23回スウェーデン研究連続講座

違いを生むものは何か—
スウェーデンと日本人の歴史的社会的背景

スウェーデン大使館
科学技術アタッシェ
サビーネ・エラース

スウェーデン人の日本人観 日本人のスウェーデン人観

最初にスウェーデン人と日本人が、それぞれ相手の国民をどう見ているかその一例を示そう。

まず“スウェーデン人の見た日本人観”の例では
「礼儀正しく従順である」「創造的ではないが勤勉である」「節約をする」「正直で犯罪が少ない」
「自尊心が高いが傲慢さもある」

一方“日本人の見たスウェーデン人観”の例では
「活発で、知的で、勉強好きである」「教育熱心である」「神に対して敬虔な気持をもっている」「タフだが頑固である」

この前半の“日本人観”は、1775—1776年に日本を見聞した植物学者ツェンペリイのもの、又、“スウェーデン人観”の方は、1873年に日本の特命全権大使としてスウェーデンを訪れた岩倉具視のものである。すなわち230年前と130年前の日本人観とスウェーデン人観であるが、両国の文化を比較し、特徴を知る上で参考になる。

文化比較のものさし

異なる文化を比較するには、共通のものさしが必要である。ものさしにはいろいろなものがあるが、ここでは「歴史的社会的背景」をものさしにして、日本とスウェーデンを見てみよう。

日本の歴史的社会的背景

- ・日本は大陸から離れた島国である
そのため孤立した文化を作ることができた。
- ・米が生活の中心であった
主食が米であり、米が経済の基礎であり、国民の80%は農民であった。
そのため独特の稲作文化が育った。
- ・恥を不徳とした
日本人は恥を恐れ、社会で恥をかかないよう子弟の躰をした。
- ・儒教の教えをモラルの規範とした
日本では儒教の教えが宗教と同じ効果を果した。
- ・甘えの構造が生れた
上は下の面倒を見て下は上に忠誠を尽くす、親は子を庇護し子は親を支えて家を護る、という社会風土が「甘え」という日本独特の精神構造を生んだ。

スウェーデンの歴史的社会的背景

- ・スウェーデンは大陸の端にある
スウェーデンは大陸の北の端にある半島で、ヨーロッパから距離的にはなれている。
- ・自然環境が厳しい
食物の育ちにくい不毛の土地が多い。自然環境は厳しく特に冬は寒く長く厳しい。
- ・罪(guilty)の意識がある
罪(guilty)の意識が良心のとがめとして教えられ、自制心を養う支えとなっている。
- ・宗教としてルターの教えがある
ルターの教えにより、「個人の義務」「忠節」といったモラルが個人に根付いている。

民族・文化混合の背景

歴史的に特に日本がヨーロッパと異なるのは、日本はこれまで民族が征服などにより他民族と交わることなく来たのに対し、ヨーロッパでは常に領土拡大のための戦争・統合・分離が行われ、他国の民族や文化との混合が頻繁に行われてきたことである。

歴史的社会的背景と国民性

以上のような歴史的社会的背景を前提に、日本とスウェーデンの文化・国民性の違いを述べてみよう。

日本

- ・均一の社会、すなわち調和を重んずる社会を形成している
- ・皆が集団責任的思考をする
- ・人間関係の規範は、義理人情といった情緒的な面を重視する
- ・意志や情報の伝達の真髄は、以心伝信であると考え
- ・物事の本質の理解は、悟りによって得られると考え

スウェーデン

- ・個人を重視し、個人間の対立はあることを前提にした社会を形成している
- ・個人の行動は個人が責任をとる
- ・人間関係は法律・契約を重視する
- ・意志や情報の伝達は“言葉”が一番の基本である
- ・理性とは、言葉によって組立てられた論理によって築かれると考え

スウェーデンと日本人の考え方や行動の違い

それでは上に述べた国民性の違いが、実生活上で具体的にどのように出るか述べてみよう。

- ・人との付き合いにおいて、日本人は相手の勤務先、肩書、仕事の内容等を気にするが、スウェーデン人はその人の個性に興味を持ち、職業、経歴等には興味を示さない。
- ・他の人から知識、情報を得たい時、日本人は自分の信頼出来る人物からそれ等を得ようとするが、スウェーデン人はその道の専門家から得ようとする。
- ・仕事をする場合、スウェーデン人は自分の責任と権限の範囲を明確にし、その範囲以外には口も手も出さないが、日本人の場合は個人の仕事の責任／権限の範囲は明確でないが、半面全員が連帯責任で仕事をしようとする。
- ・スウェーデン人は普遍性を重んじ、法律や契約の解釈の仕方に融通性はないが、日本人は状況によって融通性のある解釈をする。
- ・スウェーデン人は、人の言葉を言われた言葉通りに理解し裏を考慮をしないが、日本人は言葉の裏の意味も理解しようとする。

まとめ

国が異なると、相手の考え方や行動が理解できないことがある。しかし国が違えば文化が違い、考え方や行動に違いが出るのは当然である。むしろ文化の違いを楽しみ、その違いからお互いに学び合う姿勢が必要であろう。

◎ [目次へ戻る](#)

◎ [このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31

○ 目次へ戻る



スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

「暗黙の了解」の支配する社会日本

経営コンサルタント
ヨアキム・セーデルンド

日本の社会と、他の先進諸国の社会との間には多くの共通点がある。国民としては、個人個人は教養があり、自己中心のかつリスク回避型の人間と一緒に暮しながら、国全体のライフスタイルや富を向上させるべく共通の目標を持ち、国民の価値観を高めようとしている。この点に関して言えば日本もスウェーデンも同じである。

ところで私が日本に来て驚いたのは、日本では個人的にも社会としても、企業人も政治家も、その行動は「書かれざるルール」とか「日本流礼儀規範」といった暗黙の了解事項のもとに行われているということである。我々西欧人から見ると、日本には「書かれた規律」と「書かれてない規律」があるということ、ここに大きな文化の違いがあるように感ずる。

「暗黙の了解」というものが日本のビジネスや文化、言葉に溶け込んでいて、これがそれ等の中に大きな部分を占めている。私が日本の「暗黙の了解」を初めて意識したのは、私が日本語学校で日本語を学び始めた時である。

西欧人は、スウェーデン語でも英語でも、“You must go to school”という言い方をするが、私がまず驚いたのは、同じ意味のことを表現するのに日本語では“must”にあたる言葉を用いず間接的な言い回しをするということであった。

このケースでは、日本語では「学校へ行かないと！」などと言う。そしてこのような間接的な言い方は他にも沢山あることが分かった。

私を更に驚かせたのは、日本ではこのような間接的な言い方をしながら、今でもちゃんと社会が動いているということである。西欧では歴史的に国と国、国と人との間の統制や調整は、最も直接的な言葉で明確に表現された法律によって統治されてきた。西欧では暗黙の了解と考えられていたものが災いして、それが全体主義や過激主義体制を生んでしまったという長くて暗い歴史を経験してきた。

従って西欧では、人が守るべき事柄は法律の中で直接的表現であいまいさなく書き表し、不都合があれば人々のコンセンサスを得てそれを書き替える、というのが最も良い方法と考えられている。

ところが日本の社会では、法律は書かれたものとして行動を規制してはいるが、皆の了解が得られれば、「暗黙の了解」のもとに人は動くことがあるのである。

「暗黙の了解」は、うまく使われれば、社会としてもものすごいパワーを発揮できる柔軟性この上ない管理手法と言える。これが良い方向に機能したので日本は第二次大戦後30～35年で驚異的復興をとげられたのであろう。

しかし「暗黙の了解」は、反対の意見を持つ人がいても、仲間はずれを恐れて賛成しているふりをしている場合があり、そのため皆の総意を得たとして社会全体が極端な方向に走ってしまう危険性もある。これが「暗黙の了解」社会の強い点でもあり弱い点でもある。

しかしこの「暗黙の了解」が、歴史的に日本の優れた技術や素晴らしい芸術、そして独特の精神修養などの文化を生み出してきたというのは事実であり、このことは多くの人達が認めるところである。

スウェーデン人そしてスウェーデングッズ

スウェーデンインポートオフィス(有)
内田 知佐子

スウェーデンとの最初の出会いは1964年、相模大野にあった寄宿制のスウェーデン学校のホフナー牧師が特別に開いて下さったバイブルクラスに友人と通ったのがきっかけである。

私はいつも先生が履いておられた木靴に魅せられ、特別にスウェーデンから取り寄せていただいた。下駄と違って土踏まずがフィットする履き心地と、そのデザインが気に入り、得意になって履いて歩いたものである。先生のご自宅の居間で見た家具や敷物、カーテンなどにも、日本と違うぬくもりがあり心地よかった。初めて食べた手作りのジンジャークッキーやサフランパンは素朴な味だった。しかし、今でもはっきり思い出す、一番心の奥深く残っているのは、当時のご夫妻の優しい笑顔だ。

年月は流れ、1991年、出張でイエテボリを訪ねた。スウェーデン本社の受付のリンダは、初対面の私に、昔からの友人のようなもてなしをしてくれた。仕事の後に買い物、自宅への招待、ご主人の運転で市内を案内してくれ、時計の針はとくに11時を回っていたにも関わらず、ホテルまで送ってくれた。この気さくさ、このホスピタリティー、私にはないのではなかろうかと自問しながら眠りについた。

秘書をしているアニカは会社から歩いて30分くらいの街中に住んでいた。ゲストルーム付きのアパートで、いつも手作りの夕食で歓迎してくれる。キャンドルを食卓に灯し、デザートは近くで摘んだというグズベリーのパイだったりする。こんな街中にグズベリーがたくさんあるというのにも驚かされた。

エスキルステューナを訪問した時のことだが、夜の10時過ぎに着いたにもかかわらず、ブリッタは駅まで出迎えてくれ、家族そろってワインと軽食でもてなししてくれた。前夜にスペイン出張から帰ったばかりというのに、自宅の門で小さな火をたくスウェーデン流という歓迎が嬉しかった。

心あたった人たちとの出会いとスウェーデン製品との触れ合いから、スウェーデングッズの輸入を試みようという気持ちが自然に育まれていき、2000年、ガラス容器、食器、カトラリー、ファブリックなどの輸入を始めた。

支払はどことも30日の後払いで、国内取引と変わらず、やりやすい。困るのは商品の梱包が、メーカーにもよるが、概していい加減なことである。中の化粧箱が壊れて届くような貧弱な梱包だったり、緩衝材を使いすぎて嵩が大きくなり、航空運賃を2倍も払う破目になったりする。注意しても現場まで届かないのか、改善されないのはちょっと悲しい。

スウェーデンには日本人好みのガラス類、陶器、リネンなど色々あるが、特にスウェーデン人のデザインしたファブリックは、フィンランドのマリメッコとは違う、胸にじんわりとしみこんでくる、落ち着いた、主張しすぎない、「どうしてこんなに素敵なの」とため息がもれそうなものが沢山ある。

シルバーカトラリーと言えば、日本ではフランスのクリストフルがあまりにも有名だけれど、スウェーデンのシルバーカトラリーは、デザインも使い心地もクリストフルより数段上である。フランス製のカトラリーは日本人の手には大きすぎる。その点、スウェーデンのカトラリーは日本人の手にならびにちょうどフィットする小ぶりのサイズであることを知らない人が多い。スウェーデンのカトラリーはもっともっと日本でヒットしても良い商品の一つだと思う。

スウェーデンは、わたし達には遠くて近い。

◎ [目次へ戻る](#)

◎ [このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報 - No.326 - 2004.3.31

[目次へ戻る](#)


北欧留学記

スウェーデンで法学を学ぶ

小出 裕美

私がスウェーデンに滞在を始めてから約3年半が過ぎた。これまでの経歴について簡単に触れると、まず東海大学でスウェーデン語を専攻し、在学中に1年の語学留学を経験した。東海大学卒業後スウェーデンに再度戻り、最初の1年は、ヴェステロースの大学でスウェーデン語や他の人文系・社会学系のコースをとる傍ら、週一回のペースで個人機関でスウェーデン人学生に日本語を教えた。その後、ストックホルムのScandic Hotelで2ヶ月間主にレセプションで働き、その後はSweden-Japan Foundationで事務局秘書として1年半働くこととなった。今現在はストックホルム大学で法学を専攻すると同時に、以前のSweden-Japan Foundationでの仕事も約30%に削減して続けている。今回の寄稿では、今現在の法学部での勉強を中心に話を進めたいと思う。

スウェーデンに滞在の最初の1、2年は、もともと語学と言語学に興味があった事から、語学関係や人文関係のコースをとり、将来は語学を生かした職業につけたらと漠然な考えを持っていた。しかし、個人的な事情からスウェーデンに定住することが決まり、その上で本格的に将来スウェーデンで何をすべきか、また現実的にその可能性を見極める必要が出てきた。スウェーデンで生活するにおいてはスウェーデン語が堪能である事が当たり前で、言語のみでは仕事の選択幅は一般的な、資格を必要とされない職業か、または日本関係の機関での仕事に限られてくる。スウェーデンにおける移民、または外国に背景を持つスウェーデン人の数は、総人口の約10%を占めており、社会の様々な分野で活躍をしている。しかし法曹界では、まだまだこれらの人々の占める割合は極めて低い。この事情を考慮し、また実際私自身、そして私のスウェーデン人のパートナーとも、個人的な理由から生活面で法律に触れる機会があったことがあり、それに併せて法律に興味を抱き、将来はスウェーデンの法曹界で活躍できるよう、法学専攻を決意した。

さて、ここで簡単にスウェーデンと日本の大学の授業形式の違いについて触れてみたいと思う。授業は大きな講堂での講義も何度かあるが、それ以外は約15から30人前後のクラスで授業を受けることが多い。授業中学生たちはとても活発で、積極的な参加が好まれる。ストックホルム大学の法学部は、他のスウェーデンの大学、学部の中なかでも最も採用基準が高い学部の一つである為、学生は一般的に優秀で意欲に燃えた人が多い。スウェーデンの大学では一般的に授業数はたいてい週に2~3回のみであるが、その分課題や自習すべき量が日本と比べ大変多く、最初の頃は驚いたものである。しかし、今の法学部で課せられる勉強・課題量はとてつもなく、ヴェステロースでの勉強がどんなにか楽であったかと思える程である。法学部では、古い文献や高度なスウェーデン語で書かれた文書をもとに課題をこなさなくてはならず、スウェーデン人学生たちもその難しさに悩まされる程である。しかし、皆興味と意欲を励みに、お互い助け合いながら頑張っているというところである。

日本とスウェーデンの大学のシステムの相違、学生の様子などは書ききれないほどたくさんあるが、私が最も違いが顕著であると思っている事は、日本とスウェーデンでの学生の年齢層についてである。日本では高校卒業後すぐに大学に進学するケースが殆どで(浪人を除いて)、大方学生の年齢は19~23歳程度である。スウェーデンでは、高校卒業後、そのまま進学する人も多いが、その他に数年働いてから、または旅行やオペア制度などを利用して海外経験を積む等、数年経ってから大学で勉強を始める人が多い。私は今現在25歳で、法学部は卒業までに4年半を要する事から、卒業時には約30歳になってしまう、とやきもきしていたが、周りの学生は既に20代後半の人や30代の人も少なくない。これらの人は、大抵別の専攻を経て法学を選択したか、または何年かの社会経験を経ての選択である。スウェーデンでは社会経験を高く評価しており、大学の採用基準にも、ある一定の年数の社会経験のある人の為の特別枠があるほどである。私自身、スウェーデンでの社会経験なしで勉強していた頃と、今1年半という特に長い期間ではないが、実際社会にでて働く経験を通してからの勉強では、驚く程その違いは大きい。日本ではスウェーデンの長所ばかりが強調されることが多いように見受けられるが、実際スウェーデンの内部に根を下ろして生活するようになると、長所だけでなく、短所や重要な問題なども見えてくるよ

うになる。総括的な視野からスウェーデン社会をとらえる為には、大学の授業だけでなく仕事を通しての社会経験もすることが、必要不可欠であると思う。

スウェーデンでは、法学部卒業後の学生の職業選択幅は大変広い。伝統的な弁護士、検事または裁判所関係の仕事から、企業、政府機関、その他様々な公的機関と、その職務も多岐に渡っている。私はまだ、法曹界内のどの分野に進むかは決断はしていないが、卒業後スウェーデンの法曹界で活躍すべく今から精一杯の努力をしていくつもりである。

(ストックホルム在住)

[目次へ戻る](#)

[このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31

[目次へ戻る](#)

北欧ニューストピックス

弱化するフィンランドにおけるスウェーデン語の立場

フィンランドは1200年から1809年までスウェーデンの統治時代を経験した歴史的背景があり、スウェーデンに倣った社会制度も多い。また人口の5%程度もスウェーデン語を母国語とする背景から、スウェーデン語も第二公用語となっている。公文書は基本的にフィンランド語と共にスウェーデン語が義務付けられている。義務教育からフィンランド人にもスウェーデン語が必修である。

しかし、フィンランドは1995年にEUに加盟し、現在では北欧の中でも最もEUに接近している国の一つである。主要貿易相手国も、後のグラフにあるように、スウェーデンの比重は10%程度に留まっている。

このような状況で、フィンランドにおける今後のスウェーデン語の扱いが現在ホットに議論されている。

たとえば、3月16日には、ヘルシンキなどで、300人の高校生が『スウェーデン語よバイバイ、選択の自由を認めろ』とデモを行い、話題になった。(写真)

現在フィンランドの高校では、母国語、第二公用語、外国語、数学または人文社会の4科目が卒業の必修科目となっている。デモをした高校生は、必修科目からスウェーデン語を除く要求をしていたのだ。

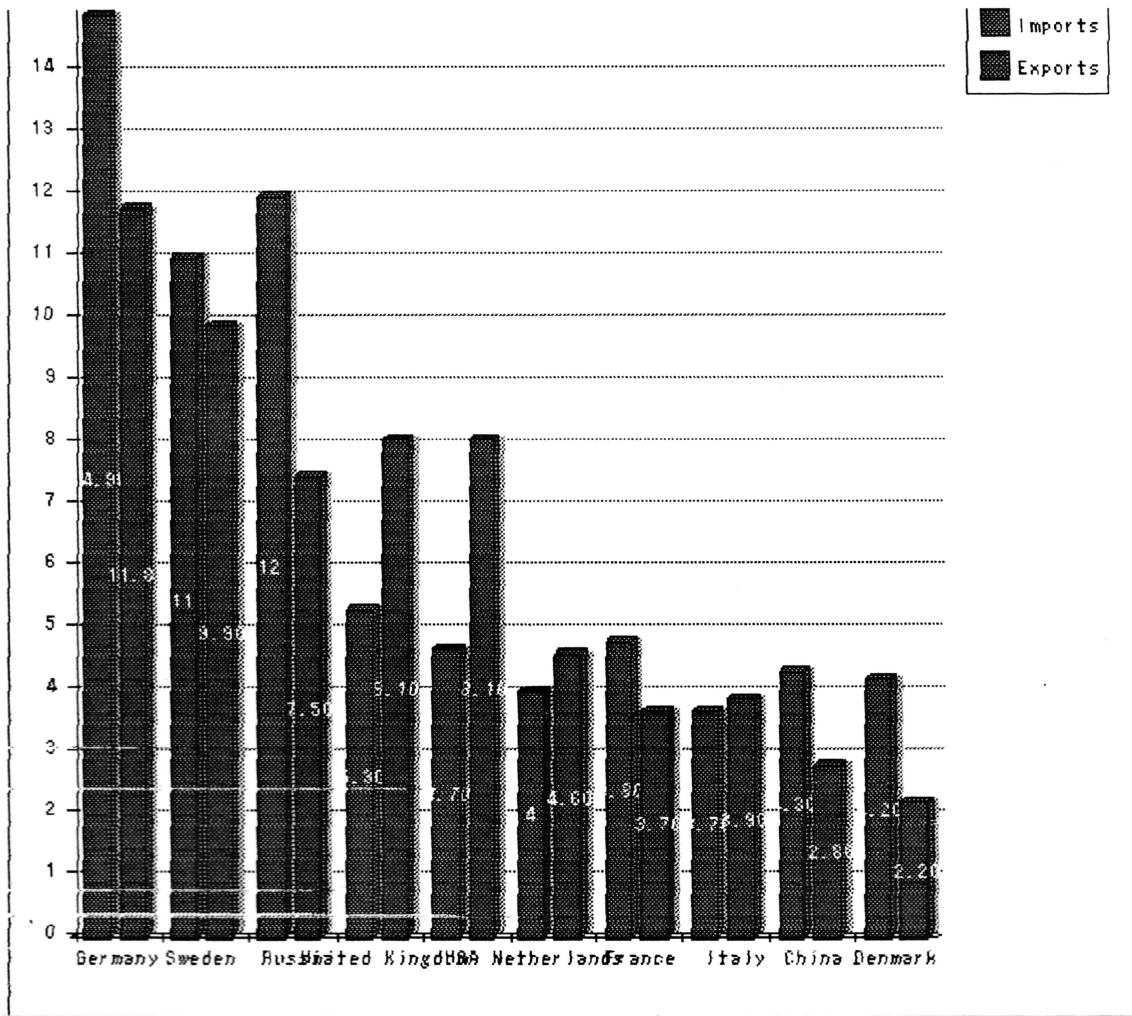
政府は、この問題を現在検討中である。1995年から57の高校が参加している試行では、必修は母国語のみである。そして、人文社会、数学、第二公用語、外国語の中から3つの科目を生徒が自由に選ぶシステムを取っている。

政府は今年の春にも高校の卒業に必要な必修科目についての法改定案をまとめる予定だが、スウェーデン語が必修科目からはずされる、と見る向きが多い。

EU加盟に伴う欧州接近により、フィンランドではスウェーデン語よりも英語の方が大切で実用的なのは当然であろう。フィンランドにおけるスウェーデン語の立場の弱化は不可避と思われる。

フィンランドにはスウェーデン語の新聞も多い。フィンランド語が出来ない私もよく読んでいたクオリティーパー、Hufvudstadsbladet紙は、4月からトップページを若者にアピールする大衆紙スタイルにデザイン変更する。

川崎一彦 (kawasaki@dn.htokai.ac.jp)



資料 Statistics Finland, フィンランド政府統計局

● [目次へ戻る](#)

● [このページのTOPへ戻る](#)



Farväl till "tvångssvenskan". De här killarna vill bli av med svenskan som obligatoriskt studentexamensämne.

Besked om studentexamen i april

Hundratals gymnasister kräver valfrihet

Trehundra röster enas i ett "Valinnanvapautta - valfrihet!". Och i april får gymnasisterna äntligen besked om det år 2007 är fritt att välja vilka ämnen man skriver i sin studentexamen.

JEANETTE BJÖRKQVIST, TEXT
MIKAEL NYBACKA, BILD

(高校生のデモを報じるHufvudstadsbladet紙)

HUFVUDSTADSBLADET

INRIKES

Onsdag 17.3.2004

Hitta sin i Hbt

Hundratals gymnasister kräver valfrihet

Sibbohar bygde sitt eget bredband

Han har Finlands farligaste jobb

Vindkraft kan ge 30 procent av elen

27 kor lämnades att dö



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31

[目次へ戻る](#)


JISSからのお知らせ

1. スウェーデン研究連続講座

年度末にあたりますので、過去2年間のスウェーデン研究連続講座一覧表(和文、英文)を掲載します。過去の講座は、ブロードバンドのビデオで見ることができます。URLは <http://www2.iiv.ne.jp/akademeia/> です。

- (1) 2002.4月「持続可能社会の構築—スウェーデンの努力」
環境ジャーナリスト レナ・リンダール氏
- (2) 5月「スウェーデン産業シリーズ1—ボルボと自動車産業」
ボルボジャパン(株)社長 カール・グスタフ・エクルンド
- (3) 6月「スウェーデン芸術シリーズ1—スウェーデンの造形美
スウェーデン家具とデザイン」
北欧建築家協会 副会長 川上信二氏
- (4) 7月「スウェーデン産業シリーズ2—アトラスコプロと建設機械」
アトラスコプロ・ジャパン(株)社長 アラン・ヘギー氏
- (5) 8月「スウェーデンの地方自治—ヨッテポリ市を例として」
川崎市総合政策局 主幹 伊藤 和良氏
- (6) 9月「スウェーデン産業シリーズ3—アストラゼネカと医薬産業」
アストラゼネカ・アストラテック副社長 シェル・グルート氏
- (7) 10月「スウェーデンのマスコミ事情—私の日本観」
ダーゲンス・インダルソリー日本特派員 ヤード・ラーソン氏
- (8) 11月「スウェーデン産業シリーズ4—エリクソンとモバイル社会の構築」
日本エリクソン(株)副社長 スベン・エリクソン氏
- (9) 12月「スウェーデンの年金改革」
慶応大学名誉教授 丸尾 直美氏
- (10) 1月「スウェーデン産業シリーズ5—エレクトロラックスと家電産業」
エレクトロラックス・ジャパン(株)社長 トード・シルステット氏
- (11) 2月「スウェーデンの対外貿易—日本とスウェーデン」
スウェーデン大使館商務部副参事官 ソニー・ソダバーク氏
- (12) 3月スウェーデン社会研究所創立35周年記念「スウェーデンの民主主義と国会」
スウェーデン国会大使 ラース・バリエ博士
「スウェーデン産業シリーズ6—スウェーデンのエコタウンのデザインと建築」
建築家 アンダース・ニークビスト氏
- (13) 2003. 4月「スウェーデンと日本の人物交流史」
(社)スウェーデン社会研究所 所長 須永昌博氏
- (14) 5月「スウェーデン産業シリーズ7—テトラパックと包装容器産業」
日本テトラパック(株)代表取締役会長 山路 敬三氏

- (15) 6月「スウェーデン芸術シリーズ—スウェーデン音楽の真髄」
スウェーデン交流センター 事務局長 戸羽 晟氏
- (16) 7月「スウェーデン産業シリーズ8—ヘガネスと金属粉産業」
ヘガネスジャパン(株)社長 ヨーラン・ワステンソン氏
- (17) 8月「日本とスウェーデンの環境問題とその取組方の違い」
環境問題スペシャリスト 小沢 徳太郎氏
- (18) 9月「スウェーデン産業シリーズ9—ノーベルバイオケアとインプラントの発達」
ノーバル・バイオケアジャパン(株)社長 ウルフ・ニールソン博士
- (19) 10月「保護雇用企業サムハルとスウェーデンの身障者雇用」
遠山塾 主宰 小笠 毅氏
- (20) 11月「スウェーデン産業シリーズ10—サンドビックと特殊鋼産業」
サンドビック(株)カンントリーマネジャー オーケ・ニールソン氏
- (21) 12月「ビジネスマンの見た日本とスウェーデン—25年間の滞日経験を通じて」
ガデリウス(株)IT、事業開発部長 ヨーラン・エドマン氏
- (22) 1月「スウェーデン産業シリーズ11—IFSとソフトウェア産業」
IFSジャパン(株)社長 ステファン・グスタブソン氏
- (23) 2月「違いを生むものは何か—スウェーデンと日本」
スウェーデン大使館科学技術アタッシェ サビーネ・エーラー氏
- (24) 3月「スウェーデン産業シリーズ12—
日本とスウェーデンのデジタル融合化とそのサービスの発展」
ノキアジャパン 主任研究員 ヨハン・ベリクビスト博士
- 2004 4月 「スウェーデン福祉社会の基盤—国民性、理念、現実」
スウェーデン福祉研究所 代表 グスタフ・ストランデル氏

Consecutive Lectures already Held by JISS

- 2002.04 [The construction of sustainable society ? Swedish efforts]
by Ms. Lena Lindahl, Environment Journalist
- 2002.05 [Learn Swedish industries No 1 ? What Volvo is doing ?]
by Mr. Carl-Gustav Eklund, President of Volvo Nippon K.K
- 2002.06 [Swedish Art Series No 1 ? The beauty of Swedish design
in case of Swedish furniture]
by Mr. Shinji Kawakami, Vice chairman of Scandinavian Architects Society
- 2002.07 [Learn Swedish industries No 2 ? What Atlascopco is doing ?]
by Mr. Allan Heggie, President of Atlascopco Japan
- 2002.08 [Role of a local government in Sweden ? case of Gothenburg City]
by Mr. Kazuyoshi Ito, General planing officer, Kawasaki City
- 2002.09 [Learn Swedish industries No 3 ? What Astrazeneca is doing ?]
by Mr. Kjell Groth, Vice president of Astrazeneca K.K. Astra Tech
- 2002.10 [Swedish Mass media ? my views on Japan]
by Ms. Gerd Larsson, Japan correspondent, Dagens Industri

2002. 11 [Learn Swedish industries No 4 ? The construction of Mobil Society, What Ericsson is doing ?]
by Mr. Sven Eriksson, vice president of Nippon Ericsson K.K
2002. 12 [Swedish Economy ? property formation in terms of Pension reform]
by Prof. Naomi Maruo, Keio University
2003. 01 [Learn Swedish industries No 5 ? What Electrolux is doing ?]
by Mr. Tord Kuhlstedt, President of Electrolux Japan
2003. 02 [Swedish External Trade, Trade between Japan and Sweden]
by Mr. Sonny Soderberg, Assistant Commercial Counselor, Swedish Embassy
2003. 03 Special lectures for 35 years anniversary of JISS
[Parliamentarism in Sweden and the consequences of the
internationalization for the Swedish Parliament]
by Dr. Lars Vargo, Ambassador to the Swedish Parliament
[Basic design and construction of Eco- town and village]
by Anders Nyqvist, Architect
- 2003
April 30 [Communication history between Sweden and Japan
Key figures and Industrial development by Swedish inventions]
By Akihiro Sunaga, managing director, JISS
- May 22 [Learn Swedish Industries, No 7 ? TetraPak and its management strategy]
By Dr. Keizo Yamaji, Executive chairman, Nihon Tetra Pak K.K.
- June 30 [Swedish art series No 2 ? Essence of Swedish Music, Listening and lecture]
By Mr. Akira Toba, Sweden Center Foundation, secretary general
- July 23 [Learn Swedish Industries, No 8 ? Hogganas Japan K.K.]
By Mr. Goran Wastenson, president, Hogganas Japan K.K.
- Aug. 29 [Environment problems in Japan and Sweden]
By Mr. Tokutaro Ozawa, Environment Specialist
- Sept. 25 [Learn Swedish Industries, No 9 ? Nobel Biocare Japan K.K.]
By Dr. Ulf Nilsson, President, Nobel Bio Care Japan.
- Oct. 28 [Labor market and Education for the handicapped in Japan and Sweden]
By Mr. Tuyoshi Ogasa, representative , Toyama Shingaku Jyuku
- Nov.25 [Learn Swedish Industries No 10- What is Sandvik ?]
By Mr. Ake Nilsson, Country Manager, Sandvik K.K.
- Dec. 15 [Swedish businessman's view on Sweden and Japan
- Through 25 years stay in Japan]
By Mr. Goran Edman, General Manager, IT and Business Development,
Gadelius K.K.
- 2004
Jan. 28 [Learn Swedish Industries No 11 ? IFS Japan, Inc
- IFS and business soft ware]
By Mr. Stefan Gustafsson, President, IFS Japan
- Feb.26 [My views on Swedish and Japanese- Women's point of view]
By Ms. Sabine Ehlers, Science and Technology Attache, Swedish Embassy
- March 25 [Learn Swedish Industries No 12 ?
Digital society and its service development in Japan and Nordic countries]
By Dr. Johan Bergquist, Senior Research Manager, NOKIA Japan

April 30 [Foundation of the Welfare society in Sweden
- Its nationality, discipline and realities]

By Mr. Gustav Strandell, Representative of Swedish Care Institute

May 19 [Learn Swedish Industries No 13 ? Medical care and its industry in Sweden]

By Mr. Hand Rhodiner, President of Monsson K.K.

[○ 目次へ戻る](#)

[○ このページのTOPへ戻る](#)



社団法人スウェーデン社会研究所

Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報—No.326—2004.3.31

[目次へ戻る](#)**JISS所報原稿募集****JISS所報原稿募集**

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1 応募資格

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受けません。

2 内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、1,600字(程度)、3,200字(程度)のいずれかの文長をお願いします。

(まだ文にならないう、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS 所報編集部にご相談下さい)

3 掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4 謝礼

ご投稿へ謝礼は、無料ということをお願いいたします。

5 原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局 所報編集係」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

[目次へ戻る](#)[このページのTOPへ戻る](#)